

川波抄

円地文子

川波抄

円地文子

川波抄

昭和五〇年二月一六日第一刷発行

(文1)

著者——円地文子

© Fumiko Enchi 1975, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三〇六四二二 振替東京九三〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価は箱に表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

川波抄

7

猫の草子

57

新うたかたの記

127

人間の道

169

光琳の波による
装幀——枳折久美子

田
地
文
子
作
品
集

川 波 抄

川
波
抄

夏富士

「お見忘れてございますか。お久しぶり」

そう馴々しく声をかけられても見当がつかなかった。場所は歌舞伎座の正面ロビーである。珍しく自作の脚本が上演されているときだったので、芝居に行く折が何度かあった。知人の顔も見え、劇場関係者にも出逢うので、自然幕間に座席を離れて立ち話すようなことも多いのである。

その日はクラス会か何かの団体客もあったらしく、私が女友達二三人と立っている間を縫って、訪問者や洋装の派手な色彩が行き違っていくので、近頃頓に弱まっている視力では声をかけられなければ、その地味な和服の痩せ型の女の人の姿は、眼につかないというより、そこにないという方がほんとうだったかも知れない。その癖、気がついてみると東京の下町育ちの女の小さっぱりした特徴が姿形なりかたちにはつきり見とられるのは確かである。

「相すみません、私この頃ひどく眼が悪くなってしまうて……人さまのお顔が一分ひと分りにく

いんでございますよ」

「そうですか。そうしていらっしやると、別に変ったようにお見えにならないけれども、こんなに近くにいて私がお分りにならないのでは可成り御不自由なのでしょうね」

「ええ、ほんとうに情けないんですよ」

とは言ったが、ものの一メートルも離れていない相手の顔だちが見とれないほどには私の視力も弱まってはいない。現に同じくらいの距離で話している女友達の顔はちゃんと分っている。でも今ものを言いかけて来た相手の顔は彫りの薄い尋常な眼鼻だちや細みのきりりと締った身体つきは分っていても、あああの人だったと見分けられないのである。

「もっとももう何十年も昔になりますものね。私、お宅に御厄介になっていましたんですよ」

「まあ、そうでしたか」

といいながら、その頃家に勤めていた女中の誰かであろうとは推察したが、誰れそれと名を思い出すことはとうとう出来なかった。その時ベルが鳴ったので、女は「いづれまた」といって派手な人群れの間に消え込んで行ってしまったし、私もまた友達といっしょに観客席へ帰った。何となく掴みこめそうで、手をそれて行ってしまう羽の薄い蜻蛉のようなもどかしい危げな印象が私のうちに残った。

家に帰って床についてからも、あの女の一見、ぼんやりしているようで妙にくっきりした印象が銀色の火山灰のように粘ばっこく心にこびりついていて、離れなかった。

昔々、私がまだ少女だった頃から家に働いていた女の人たちの名が顔つきや動作、口のききようまで交って次々に思い出されて来る。その頃には山の手の、所謂良家りようかと言われる家には、下町の堅気好みの親を持つ家の娘たちが、行儀見習いという形で働きに来ていた。私は両親から貧乏学者と教えられてずっとそう思っていて育って来たが、書生を置いていた時代もあり、女中も三人は必ずいた。それが中産階級の普通の生活だったのであろう。

従って、その頃の女中には小間使、中働き、勝手働きと区別があつて、小間使や中働きには可成り器量のいい、芸者にでもなったら結構売れるだろうと思われる娘たちが交っていた。私がそんな内の一人に小学校の送り迎えして貰っていたとき、学校の先生に、「お姉さんはいくつですか」と訊かれ、面食つたことがあつた。器量がいいと、女中さんがお嬢さんに見えるものかと子供心に妙な階級意識への反撥を感じた覚えがある。菊、もと、徳、せい、あき、ときなどの名がその顔立ちといっしょに髻髻と眼に浮んで来るのであるが、考えてみれば、彼女たちは、皆私よりも可成り年上だったので、今逢えば八十前後の老婆であらう。今日劇場で逢った女は、中年には見えたが、ゆめにもそんな年寄りではなく、声も物腰も爽かに澄んでいて老いの影はどこにも見えなかった。

とすると、私は何をど忘れしているのだろうか。当然のことであるが、大震災のあった大

正十二年前後からは、女性の職場進出も多くなったと見え、東京の下町娘が桂庵（民間の職業紹介所）を中にして、奉公に出るような習慣は失われて行つた。私の家では父が伊勢の神宮皇学館長を兼任していた関係で、字治山田（今の伊勢市）近くのそれこそ良家の娘さんが行儀見習に來た。躰けなどいっこうやかましい家ではなかったが、地方にはまだそんな古い習慣が残っていたものであろう。

その後もずっと女中は来ていたが、大正時代のような氣質は当然失われていた。私が結婚してから、戦争のひどくなるまでは、女中を使っていたが、改良したのは、昔の「何や」を「何さん」と言い変えたぐらいなもので、子供の小さかった頃、長くいて世話してくれた二、三人の名は覚えているが、あとは殆ど忘れてしまった。それでも、同じ屋根の下で可成り長く生活を共にしたというのは並々の縁ではないと見え、戦後十年も経ってから、地方へ講演に行くと、思いがけない辺鄙な土地から可成り離れた都会の会場まで、わざわざ訪ねて来て、なつかしがつてくれるのは大抵、昔の女中、つまりお手伝いさんたちなのであった。

私にとつても、何となく忘れられないように彼女たちにとつても、幾星霜を経て恐らくは生活にも有為転変があつたに拘らず、私の実家に勤めていた数年の間に主人の娘とはいふものの、半分は妹のように叱言なども言い、馴れなじんだわがままな女の子の面影は忘れずに青春の一コマの中に繰り込まれていたものであろうか。いづれにしても、今生きていれば、喜寿をすませた老齡の女たちである。

そのうちのひとり、菊という女はまだ私が小学校に行かない頃に、家に帰って嫁入ったが、両親も弟も肺結核で亡くした不幸な身の上の人で、叔父が勲章屋で根津の宮永町に住っているのが宿元であった。色の浅黒いのが欠点だったが、髪が濃く、富士額（歌舞伎の女形の鬘のように額のまん中に細く毛筋の通った昔の美人型）で切りつまった瓜実顔、口もとの少し大きいのが、当時、帝劇の女優のナンバー・ワンだった森律子に似ていた。口のきき方も動作もはきはきしたいいかにも東京の下町の女らしい人で、当時、私のうちにいた書生には口説かれたという話である。私はずっと前「吉原の話」という小説の中で、適当にフィクションを入れてこの色男の書生について書いたことがあるが、可成りな不良青年だったのを父が引取って、弁護士試験を受けさせるということとで十年近くうちへ置いていた。別に美男というのではないが、旗本の妾腹の子だったとか、芝居に出て来る御家人崩れの色悪のような感じの男であつたらしい。学者の家にこんな男を置いたのも思えば妙なものが、東京生れの父の一種の道楽氣も交つていたのであろう。この高槻という男は法律の勉強をするよりも、家の内輪の事務を取捌く執事みたいな役を引受けて、結構切れるところを見せ、女中や出入りの者にはひどく威力があつた。父は別格だったが、高槻さんに叱られるというと、女中たちは狼狽てふためいて、命之、従うという風であつた。高槻は自分もてきぱきしているだけに癪癪持ちで、氣に入らないことがあると女中たちを叱りつけ、ひっぱたくことなどよくあつた。女中たちが高槻さんに叱られたといつて泣いたりしているのを私は見た覚えがあるが、

彼女たちはいつこう、邪陰な高槻さんを嫌っている様子がない。幼女ながら私にはこれが不思議であった。

高槻は、末っ子の私をひどく可愛がって、両親の側に置かず、抱きかかえして、夜も自分の寝床へ寝かしたという。

「ふうちゃんが夜中に眼をさまして、床の上に坐りこんで義経のお話を始めるのには困りますよ」

と彼は祖母や母に嬉しそうに語ったそうだ。男の子のようにあばれっ子だった私に念入りに細工してこしらえた紙の鎧を着せ、自分が馬になって家中這いまわると、子供の大將より馬が怖いので女中たちはきやあきやあ声を上げて逃げ走った。彼女たちにもあれは楽しい遊びだったのかも知れない。

四、五年辛抱していた後で、高槻の女道楽がまた始まった。後で母にきいた話では吉原の本店で二枚目を張っていた千種という女が相方だったという。書生の身分で花魁おいらん買いの金がある筈もなし、無断でちよいちよい家を明けるようなことも、父の手前出来ないのも、彼の吉原通いは無理つづきだったらしく、一度などは田舎の叔父が病死したことにして一週間ぐらい家を明け、居つづけしたという話である。勿論、金は女が身み上りあがして貰いだが、半年ばかりして、一度は、何とか諦めをつけることにして縁を切った。その間にもうちの女中たちに二人ぐらい関係が出来て一人は妊娠したのを墮胎させたという。そういう高槻なので、菊に

は勿論眼をつけて、頻りに口説いたらしい。菊の方も憎からず思っていて、彼が吉原通いで晩くなって帰って来ると、父に知られるのを怖れて、予め内玄關の潜くぐりのカランカラン鳴る小鐘を布で巻いて置いたり、そと起きて行つて閉まりを開けてやったりした。

「だけど奥さま、私は高槻さんに前に二度も捨てられた人を見えますからね。あの方の玩具にはならないと腹をきめていましたの」

菊は苦味のある東京女の色氣と眞実味を見せて私の母に語つたそうであるが、ほんとうは高槻の吉原通いの晩い歸りに、そと手引きしてうちへ入れるときなどに、二人だけの間に秘かな愛情は交わされていたものと思う。

高槻がいよいよいろいろな隠しごとが分つて私の家にいられなくなり、立ち去つて行く少し前、私を抱いて風呂に入っていたことがある。四つぐらいの時のことで、私は高槻という男の顔さえまったく覚えていないが、「タアちゃん、タアちゃん」といつてなついていた。

四角い湯船の湯がたふたふ揺れていたのとお上の方にある縦に太い棧を入れた高窓から黄色い銀杏の葉が舞いこんで風呂の湯の上に浮いていたのが記憶に残っている。

「タアちゃんはもうふうちゃんのとこにいないくなるよ」

と高槻が云つた。

「いや、タアちゃん行っちゃいや」

私は別に泣きもせず言つて、乗っている高槻の股ももを蹴つた。

「タアちゃん、ふうちゃんよりもっと可愛い子のところへ行くの」

「ふうん」

私はふくれ、

「タアちゃん嫌い」

といって、ばしゃばしゃ湯をはねて、高槻の顔にかけた。

高槻がいなくなったのはそれから間もないことであつた。彼がいなくなつてから、私は両親をはつきり認めるようになった。「吉原の話」に書いているが、これも成人した後、母にきいた話である。高槻は吉原通いの口実困つて、私をだしに使つたという。高槻の母の品のいい老女が本郷に住んでいて、時々彼は私をそこに連れて行く。その時にも、仔細らしく、

「母のところに一晚泊りに行きますから、ふうちゃんをお借りします」

といって、私を連出した。たぶん数え年三つぐらいの時のことであろう。麴町の富士見町から浅草の吉原まで、どういう風に行つたものか、彼は千種のいる中籬に私を抱いたまま入つて行つた。

「眼がぱっちりして可愛いのね。いいお家に生れて仕合せなお嬢さんね」

と千種はわが子のように抱きかかえて、頼ずりしたと高槻は母に話したそうであるが、それがお世辞でなかったとしても、私は成人して後仕合せなお嬢さんにはならなかった。